

聖書：第二サムエル記16章1～14節

説教：主が命じられたのだから

あらすじ

ダビデは息子のアブシャロムからいのちを狙われ、都から脱出し荒野に逃げていきます。信頼していた家来たちも次々とダビデを見捨てていくありさまです。そのなかでも、側近のアヒトフェルが、大切な軍事機密を持ち出して敵に寝返ったとの知らせを聞いたとき、さすがのダビデも衝撃を受けます。どん底に突き落とされたような心もちのまま、オリーブ山の坂道を登り、その頂で礼拝をささげていきます。ダビデはもう神に祈るほかすべがありません。

そこへ、ぼろぼろの服をまとい、頭に土のちりをかぶったひとりの男が現れました。アルキ人フシャイ、ダビデの友と呼ばれていた人物です。多くの者がダビデを捨てたとしても、なおダビデの味方となり、苦しみのときに寄り添おうとする者が残されていました。ダビデは彼に言います。「あなたは、アブシャロムのところに行ってもべとなりなさい。そこであなたはアヒトフェルが考え出してくる作戦計画を打ち砕きなさい。」フシャイはダビデのことばに従い、エルサレムに戻っていきます。

1 ツィバ

1) ヨナタンの子メフィボシェテ (サウルの孫)

ダビデが山から降りようとしているとき、ツィバと呼ばれる人物がたくさんの食料を持って会いに来ました。彼はいったい何ものか。まずそのことを確認します。時間をさ

かのぼり、初代の王であるサウルが息子ヨナタンと友に戦場で死んだ頃に戻ります。王が死んだので当然次の王をどうするかということになります。いっぽうには、サウル家の中から世継ぎが出るべきであるとする保守的な勢力があります。彼らは、サウルの息子イシュ・ボシェテを王とします。

また他方には、ダビデを支持する人たちがいて、彼をイスラエルの王としました。ひとつの国にふたりの王さまが立ったこととなります。そのことでたびたび争いが起きます。結局、イシュ・ボシェテが味方に暗殺されたことで、ダビデは後ろから押し出されるようにしてイスラエルの正式な王となりました。

サウルとヨナタンが死んだとき、ヨナタンの息子であるメフィボシェテはまだ五歳でした。ダビデは後にこのメフィボシェテを捜し出し、自分の家族同様に養っていきました。そのような複雑な経緯が過去にあつて、それが今日の伏線になっています。

ツィバというのは、メフィボシェテに仕えて世話をしていたしもべです。その彼がいま、たくさんの食料と二頭のろばを連れてダビデのところに来て来ました。彼のことばによれば、すべてダビデとその家来たちのためにいろいろなものを用意してきたのだということになっています。

2) ツィバの嘘に傷つくダビデ

しかし気になることも彼は言っています。ダビデがメフィボシェテの消息を訪ねたのに対しこう答えています。3節。「今、エル

サレムにおられます。あの人は、『きょう、イスラエルの家は、私の父の王国を私に返してくれる』と言っていました。」サウル家の血筋を引くメフィボシェテはダビデが落ちぶれていくのを見て、イスラエルの王になりたいと語ったと言うので。つまりダビデを裏切ろうとしているということです。ダビデはツイバのことばを信じて、メフィボシェテの持っていたものを取り上げ、すべてツイバに与えると言います。

ツイバのことばは、後になって嘘であったことが明らかになります。どうして嘘をついたのか。おそらくこういうことでしょう。彼は抜け目がありません。今世の中は騒然としています。この先どうなるのかまったく不透明です。そういうとき人間は何を考えるか。普段考えている欲望が頰をもたげてきます。日本語で「火事場泥棒」ということばがありますが、ツイバがやっていることはまさにそれです。ダビデはもう力がない。この混乱に乗じて財産を独り占めしておこう。いまはメフィボシェテと自分とは半分ずつにしてあるけれど、嘘をついてダビデをだまし、財産が全部自分のものになるようにする。そうなれば世の中がどう転んでも大丈夫。万が一にもダビデが勝ち、後で嘘がばれても、ダビデに頭を下げればダビデが赦すだろうと見抜いています。(実際そうなるわけですが。)このように、ツイバは自分の欲望を満たそうとダビデを利用するために近づいてきました。ダビデは、ツイバの嘘によってまた一つ苦しみを味わっていきます。

2 シムイ(ベニヤミン人、サウル家の一族)

1) のろいのことばを吐き出す

神に祈り、神を礼拝しても、ダビデの本当

の友となって来てくれたのはただひとりフシャイだけでした。山を降りても、ツイバの嘘のことばに苦しめられます。やれやれと思ったら今度は、サウル家に属するシムイという男が寄り寄ってきました。「出て行け、出て行け。血まみれの男、よこしまな者。」ダビデにずっとつきまといながら、のろいのことばをダビデに浴びせていきます。サウル家とダビデ家の間に起きた王座を巡る争いのしこりは、あれから何十年もたっているのですが、まだまだ残っているのです。

2) 主が命じられたのだから

最初は我慢をして聴いていましたが、さすがの家来たちも怒り出します。これに対しダビデはこのように言います。11 節。「見よ。私の身から出た私の子さえ、私のいのちをねらっている。今、このベニヤミン人としては、なおさらのことだ。ほうっておきなさい。彼にのろわせなさい。主が彼に命じられたのだから。」

おそらくこんなひどい悪口雑言を言われれば、誰でもこの家来たちのようにとても黙ってなどいられないでしょう。でも、ダビデは言わせるがままにします。その理由を、「主が彼に命じられたのだから」と説明します。シムイが言っていることばはすべて偽りです。偽りのことばを言うようにと主が命じることがある。そんなことがあるのかと不思議に思います。

3 ダビデ

1) 心をさぐられる

それはそれとして、ここではダビデの心に目を留めていきます。ダビデは何を思っていたのでしょうか。シムイの言っている事は嘘で

あると最初は自信があります。けれども、ずっと何時間も同じことばを聞かされ続けたらどうでしょうか。いろいろなことを考えるでしょう。過去にさかのぼって、自分がイスラエル王になったときのことを思い出し、大丈夫かどうか点検を始めます。サウルが死んだとき、自分は外国に逃亡していました。イスラエルを救うためにどうしたらよいか、ダビデは悩みます。戻ればサウル家との間で王座の継承権を巡って争いが起こることは火を見るよりも明らかでした。それでもダビデがイスラエルに戻ったのは、ひとえに神の命令があったからです。戻ってから、ダビデはペリシテ人と闘いながら、一方ではサウル家と紛争が起きないように最善のことでしてきたつもりでした。サウル家の人たちのために親切を尽くしてきたつもりです。サウルの孫であるメフィボシエテを引き取って家族同様に扱ったのもそのためです。

けれどもこんなふうにもじめな姿に落ちぶれていくと、ダビデの言い分を聞いてくれる人はだれもいません。どんなに正しいことをしたとしても、返ってくるのは非難のことば、呪いのことばだけです。

シムイのことからダビデは一つの告白に導かれます。「私の身から出た私の息子さえ、私のいのちをねらっている。」ツイバが嘘をいったこと。シムイが呪いのことばを吐き出していること。そして息子アブシャロムが父のいのちをねらっていること。これらすべて主の命令によることである。主の命令であれば、「どうして」とか「なぜ」と問うことはできません。ただ苦しみの中を忍耐して歩いて行くしかありません。

それでも、私たちは問いかけたくくなります。主はどうしてこのような苦しみをダビデに

負わせるのだろうか。

2) 主は私の心をご覧になる

12節でダビデは告白しています。「たぶん、主はわたしの心をご覧になり、主は、今日の彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」

ダビデだって、心の中には言いたいことが沢山あったでしょう。反論したいことは山ほどありました。でもひとことも自己弁護しません。今の世の中は、反論しないで黙っているなら、相手の主張を認めたことになるのだそうです。そうならないように、大きな声で反論しなければならぬ。そういう世の人々から見ると、ダビデは完全な負け犬です。

しかしこの世界は見えるものだけがすべてではないことを私たちは知っています。見えないけれども、確かに存在しているものがあります。私たちの心です。人間はほかの人の心の中を見ることはできません。けれども神はできます。ダビデはそれを知っています。人は嘘をつき、呪いのことばを吐くけれど、神はそうではない。心の中にあるとおりに主は報いてくださる。

ではダビデの心の中に何があったのでしょうか。すべて正しいことばかりでしょうか。なにもやましいことはない、という自信があったのでしょうか。だからしあわせを報いてくださると言っているのか。とんでもありません。もちろん神のことばに忠実に従ってきたということはあったかもしれないけれど、ダビデが言おうとしているのはそんなことではない。反対です。自分がいかに正しくない者であったのか。いかに息子を正しく育てることができなかったか。若い女性を見ると、自分の欲望をおさえることができず、

やってはならないことをやってしまう。そういう弱さから何度も失敗した。罪と呼ばれるものです。

3) のろいに代えて、しあわせを報いてくださる

主をご覧になるのは、ダビデ弱さ、罪です。それなのにどうしてこんなことが言えるのでしょうか。「主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださろう。」この世の常識によれば、弱いことは評価を低くするだけ。ところが神の評価は正反対なのです。

主はこう言われるのです。「あなたが今誤解され、非難され、呪いのことばを投げつけられたとしても、わたしはあなたの心を見ています。失敗したことの悲しみ、罪を犯したという悲しみ、弱さに苦しんでいるのを知っています。わたしも十字架に向かうとき、あなたと同じ苦しみを味わいます。人々はわたしに憎しみのことばを投げつけ、こぶしでなぐり、裸にし、十字架につるします。でも何も反論しません。ほふり場に引かれていく羊のように黙って従います。でも父なる神を信じ続けます。父なる神はわたしの心をご覧になってしあわせを報いてくださいます。父なる神が救ってくださり、今の苦しみと悲しみに代えて必ずしあわせを報いてくださることを信じます。十字架で死んだとしても、この方が死からよみがえらせてくださると信じ続けます。」

ダビデはオリーブ山を降りていくとき、大きな苦しみを味わいました。主イエスもオリーブ山で祈った後、人々の手にかかり、苦しみを味わっていきます。人々は十字架苦しむあわれな男の姿だけを見ます。しかしダビ

デが告白したように、そして主が信じ続けたように、父なる神は主の心をご覧になり、しあわせを報いてくださいました。

主の約束を信じて歩んで参ります。